『西南アジア研究』No. 50, 1999

メソポタミア初期教会遺構をめぐる建築的相似に関する一考察
――アイン・シャーイア遺跡とアラビア湾離島遺跡の発掘成果から――

岡田保良

はじめに

イラク共和国の中部に，イスラーム教シーア派の聖地として知られるカルバラとナジャフという二つの町がある。これら二つの聖都を結ぶ往還道の西方一帯を「イラク西南沙漠」と私たちは呼んでいる。オアシス都市アイン・アッタモル（別称シサーサ）やウハイダル古城ほか，紀元前に遡るほどではないがいくつものオアシス遺跡が点在し，アラブの軍勢がはじめてペルシア軍を打ち破った「カーディシーアの戦い」の舞台でもあった。

国士舘大学イラク古代文化研究所が1971年以降，長年にわたって学術調査にとりくんできたアッタール洞窟はそうした歴史環境に立地する。詳しくはカルバラの西南西約37 km，ミリー湖（別称ラザーザ湖）畔を起点として南にうちつづき，西面して数十メートル切り立った崖にその洞窟群は穿たれている。発掘の対象はもっぱら洞窟内で見つかった埋葬址であった。洞窟利用の年代は紀元後1－3世紀ごろという[1]。埋葬遺体に伴って出土した染織遺物は多彩な研究成果をもたらした。しかし一方では，解決すべき問題がなおいくつも残されていることも浮び上がった。洞窟周辺，たとえば半径10 km以内を見ても顕著な集落遺跡などなく，墓として洞窟を利用した人々はいったいどこに住まいしていたのか，またどういう集団だったのか。さらには，当地以南に続く崖に同じような外観を見せる洞窟群が数カ所知られるが，同様な利用があったのか，などの疑問である。

本稿の議論の契機となったアイン・シャーイア遺跡の発掘はそういう問題意識に始まる。1986年から3年度にわたって現地調査が行われた。その結果は，必ずしもかかる疑問に答えるものではなかったが，初期イスラーム時代のキリスト教遺跡の発見という予想外の成果をもたらした。遺跡の性格は全体として修道院跡というべきものである［Fujii et al. 1989］。なかでも発掘された教会堂建築の遺構が，シリアや北メソポタミアでこれまで知られていた建築様式とは全く異なっていること，さらにイラク西南沙漠地域に点在する数例の教会遺構と照らしても，その空間構成に注目すべき独自性を認めることなどはすでに論じたところである[2]。

本稿は，こうしたアイン・シャーイアの教会堂遺構を中心とする比較の視点をさらにイラク周辺地域にまでひろげ，徐々にだが近年この地域で増えつつある発掘事例も含め，東方キリスト教会が，イスラーム期においてなおバビロニアから湾岸にかけての広い地域において，規格化された建築様式を保持し，その造営活動を続けていた可能性を論じるものである。

I　アイン・シャーイア，ハーグ島，そしてファイラカ島

メソポタミアの，とくにアイン・シャーイア遺跡の初期教会建築を中心としたこれまでの筆者自身の議論の過程で，1959年に調査されたアラビア湾（ペルシア湾）に浮かぶハーグ島の修道院遺跡の教会遺構にも，アイン・シャーイアと同様の計画理念を認めることができることを指摘したことがある［Okada 1991 : 79－80］。ただ，小冊子 The Island of Kharg と題してギルシュマンが書いたハーグ島修道院遺跡に関する唯一の報告は，土器などの考古遺物についてのみならず，建築遺構の計測値についても記載が全く不十分であり，概報の域を出ていない[3]。

最近になって，フランス調査団がクウェイト沖のファイラカ島アル・クスール遺跡で教会遺構を発掘した成果が報じられた。1989年の発掘によるというから，筆者らがアイン・シャーイアの発掘を終えたのと同じ年のことである。その発掘はまだ第1次の本調査を終えたばかりで一連の報告も最終的なものではないが[4]，発見された教会建築のプランが公表されており，アイン・シャーイアの遺構と対比してみると，その幾何学的相似に驚きを禁じえない印象がある。報告の中にはアイン・シャーイアへの言及も若干見受けられるが，いずれも出土した土器の比較考察に引用されているだけである［Bernard & Salles 1991 : 16 ; Kennet 1991 : 102］。建築上の観点からは，ハーグ島の教会のみが比較の対象とされ，アイン・シャーイアの遺構は見過ごされたままになっている［Bernard et al. 1991 : 163－7］。

アル・クスールの発掘報告もまだ不完全であることは，発掘者自身が公言しているとおりであり［*ibid.* : 145－6］，したがって，建築に関するこれらの遺跡の比較検討は，決定的なものとはいえないかもしれない。にもかかわらず，その不十分な資料からでさえ，ある時期ある地域のキリスト教社会が一定の規格化された教会建築様式を用意していた事実が，相当な確実性をもってのちに明らかとなろう。その時期とはイスラーム勃興期の前後の時代であり，地域はメソポタミアから湾岸の島々にかけてという広域である。担い手はネストリウス派ないしはシリア語キリスト教徒とよばれる集団であった[5]。

1　アイン・シャーイア教会堂の建築的特色

三つの教会建築の比較を，それぞれに共通する建築因子を抽出して行うにあたって，それぞれの描写がぜひとも必要なのだが，アイン・シャーイアについては幾度か詳しく紹介したこともあるので，以下，比較に必要と思われる諸点を特記するだけにとどめる。

まず，教会堂自体は，単独に建てられたわけではなく，城郭のような構えの中にある（図1）。壁体はすべて日干し煉瓦積みで石膏プラスターを上塗りする。床も，廊下とみなしうるような数室を除いて，同様にプラスターを張る。壁厚は1.10 m ないし 1.15 m を測り，概ね煉瓦3枚分である。基礎に用いられた煉瓦はより堅緻で規格は 37 × 37 × 10 cm[6]。

教会内部は，三廊構成の礼拝広間と，矩形の主室の両側に脇室を伴う内陣から成る。主軸は真東西の方向になく，内陣側で北へ60度も振れる。以下の記述では便宜上内陣方向を北として扱う。

礼拝広間は，円柱でもピアでもない通常の壁によって三つの廊下状の部屋に仕切られる。通常のバシリカにならって，その中央を身廊（R 5），両側それぞれを側廊と呼んでおく。平行するどの壁にも軸対称の位置に3つずつの通路口を開け，横断方向にそれぞれ4つ開口が並ぶことはまちがいない。東側廊（R 6）は焼成煉瓦張りの中庭に面するのに対し，西側廊（R 4）はいくつかの付属室に直接通じている。南側は三廊に対して開口する部屋（R 7）となっており，シリアや北メソポタミアの諸例との対比上ナルテクスと呼んでもよいように見えるが，外壁に開口するポーチの造りがなく床も土のままなので，西北の諸室と結んだ単なる通路とみておきたい[7]。この土床の一室や付属の諸室を除いた教会堂本体部分の規模は，

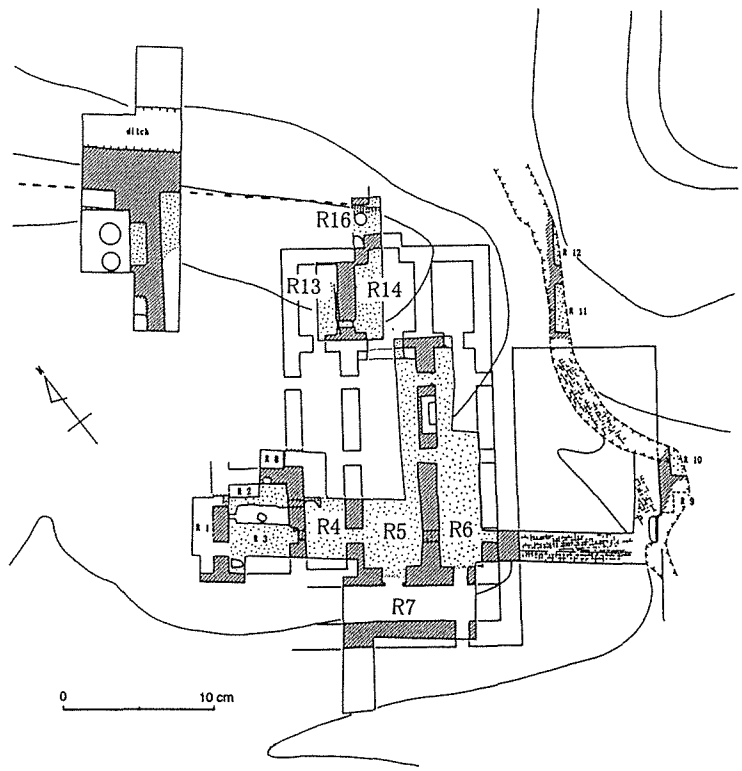

図1　アイン・シャーイアの遺構

外寸で 22.4 × 13.8 m。三廊の奥行長さは 14.5 m，身廊幅 3.9 m，側廊幅 2.5 m。三つの廊を合わせた幅は 11.5 m となる。もともと教会正面は東の中庭側だった。ただ図示したように，こちら側の外壁には後に厚い壁が付加され，開口が閉ざされた形跡がある。

三廊の北端に並ぶ内陣 3 室に対し，中央を主内陣（R 14），両側室を脇陣と呼ぶことにする[8]。奥行は 6.0 m，各室の幅は前方の廊幅に等しいと推定しているが，全部を掘りきっていないので，仮定した矩形の輪郭内に脇陣がちょうど収まっていたと断定することはできない。中央の主内陣は，漆喰張りとした床を脇陣や身廊の床より約 0.3 m 高く造る。身廊に向く正面を広く開け放ち，3 段のステップを境に設ける。反対の奥壁に，半円形アプスに代る 1.05 m 深さの矩形のニッチを備える。この部屋のみ壁画で飾られていたことが，多彩な顔料をとどめた大量の漆喰断片からわかる。

東脇陣は，側廊との境に扉の軸受け痕をとどめる煉瓦が置かれていたので，扉を設けて側廊と通じていたことがわかる。また，扉の有無はわからないが，この脇陣は別の部屋とも隣接する。西脇陣（R 13）の方はほんの 0.3 m ほどの幅をもつ通路で主内陣と通じていた。こういう通路はシリアの教会建築でごく普通に見られる。主内陣が，未発掘の東脇陣とも同様に通じていたかどうか，シリアには両方の事例があるので，ここでは不明といわざるをえない。内陣背後は外界に面しておらず，外周壁との間に一室（R 16）があってパン焼き窯が置かれていた。この部屋から外界に通じる戸口が，教会堂の中軸線に一致する位置にある点は，建築計画の上から見逃せない。

多くの発見遺物から判断すると，この教会がその機能を失ったのは恐らく 9 世紀中のことのようである。様々な箇所で補修や改変の痕跡が見受けられ，創建後，完全に廃棄されるまでの間の事情をある程度まで推測できるが，ここでの主題とは関係しない。

以上の観察結果から，創建当時のアイン・シャーイアの教会堂は，日干し煉瓦という脆弱

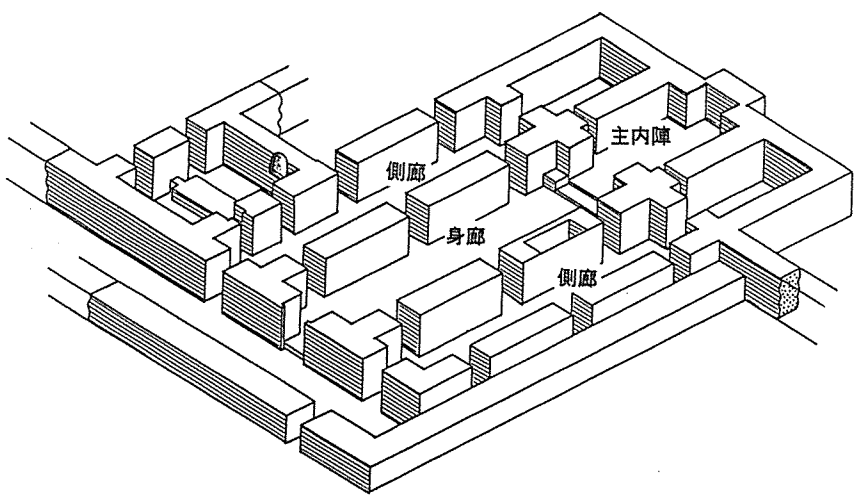

図 2　アイン・シャーイア教会堂の復原

な建材を使用したとはいえ，対称性を重視し均衡のとれた平面形状に復原することができる（図２）。そこには経験と建築技術に裏打ちされた精緻な計画性を認めてよいであろう。

2　ハーグ島修道院遺跡

ハーグ島は，長さ約10 km，幅4 kmないし5 kmほどの珊瑚礁の島である。キリスト教修道院の遺跡は島の西部にあり，1959年にギルシュマン率いるフランスの考古学調査団が訪れたときの印象によると，そこは「不毛で誰も立ち入ることのない岩の露頭が台地をなしていた」[Ghirshman 1960 : 11]。

一方東部一帯はササーン朝時代に信徒が居住していたといわれ，調査当時にも小さな村があった。近傍には，18世紀にオランダ人が建ててのちに廃墟となった砦や，尾根に向かって広がる墓地があった。これらと別に，尾根ぎわの水平な岩肌の上で，おそらく4世紀中に廃棄されたらしいポセイドン神殿の遺構と，それに重なる拝火教神殿の廃墟が発見されている。こうした宗教施設の回りには，多数の岩窟が穿たれていた。うち2つの窟は大きなカタコンベで，ギルシュマンによるとその年代は3世紀，一方にはシリアのパルミラに典型を見出す様式のレリーフを認めるという[9]。ほかにネストリウス派キリスト教徒に特有とされる十字架を刻んだ岩窟もあり，信徒の墓とみなされている。しかし報告文中には埋葬址があったという証拠も，年代を示唆する根拠も全く示されていない。

島のどこかにパルミラに代表されるシリア方面からの入植地があった可能性は彼の指摘のとおりと思われるが，その人々がキリスト教徒であったとは考えがたい。カタコンベがシリア人の埋葬にあてられたことは大いにありうるにしても，その他の小さな岩窟とは形式上の相違が著しいうえ，3世紀というような早い時期に，シリア人がいわゆるネストリウス派独特の十字架を使用していたなどということはほとんどありえないからである。遺構から推定できる事実として，シリア人入植期とキリスト教普及の時期との間に拝火教が介在していたことはギルシュマンも認めており［*ibid.*：6］，そうだとすれば，キリスト教徒たちの岩窟はカタコンベよりも何世紀かのちに営まれた可能性が強い。しかも岩窟は墓として掘られたとは一概に言えない。いずれにせよ，修道院はもちろんとして初期キリスト教の足跡は島中に広がっていたかのようである。

さて，修道院遺跡にあった教会堂について，先に記したギルシュマンによる唯一の報文からその詳細を見ることにしよう（図３）。まず教会建物自体の描写はつぎのとおり。

「大部分は1面以上整形された石で造られていた。ササーン朝様式で建てられた三廊式礼拝室を持ち，身廊が側廊より広い。」「礼拝室の外角は，きれいに切り揃えた石材で積んだ付け柱で支持され，礼拝室を覆う3列のヴォールトが，かつてはおそらく20ないし23フィートの高さに立ち上がっていたことだろう。ナルテクスから礼拝主室には5段の階段で降り，その反対の端には4段からなる第二の階段があって内陣に導く。」「内陣は正方形でドームが架かる。一方方形のアプスにはヴォールトが架かっていたであろう。祭壇の位置は内陣中央

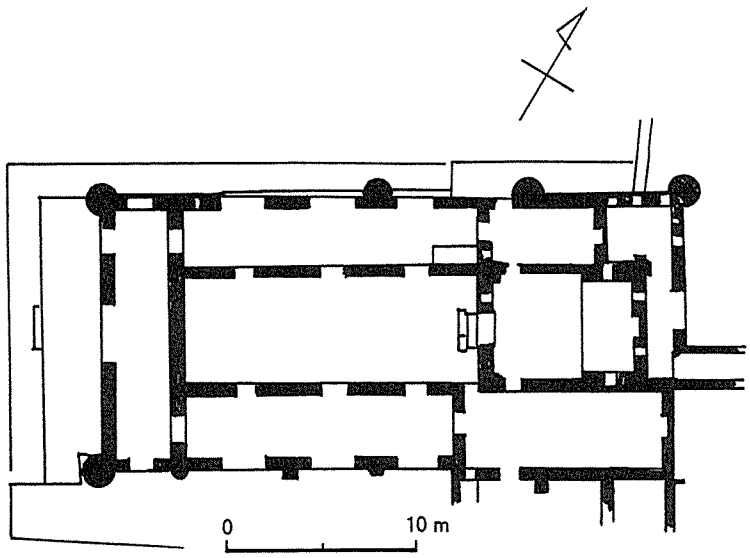

図3　ハーグ島修道院教会堂の平面
（ギルシュマンの図［Ghirshman 1960 : Pl. 12］より筆者作図）

だとわかった。というのは，そこの漆喰塗りの床に円い凹みがあり，聖壇から落ちた黒い石の破片がたまっていたからである。内陣左手はプロテシスで，排水孔付きの水盤が置かれていた。ここでは壁の立ち上がりが8フィート以上のこる。アーチ形天井のアルコーヴも全部そのままだった。内陣右手はディアコニコンで，その奥の両隅にはベッドと聖容器を置く。ネストリウス派修道士には，聖所でいく晩かを過ごす義務があったのだ。ベッドの右隅に，それに向きあうように，人の手がちょうど入るくらいの隙間をあけた物入れの一種を，通常どおり石でつくっていた。その中に聖遺物を置き，修道士が隙間から手を入れてそれに触れるようにしてあったのだろう。柱のミニチュア形をした2個のランプを，これら両隅から発見した。ディアコニコンからは広々した廊下に出ることができる。ここにはビチュメンで支柱に取り付けた陶製のランプがのこっていた。廊下に面して並ぶ部屋は聖具室である。その南端では，聖具室につづいて小さく独立した区画がある。それは扉番の住まいだったろう。」［*ibid.* : 11－3］。

つづいて装飾要素や付属施設に言及し，「礼拝室，内陣，さらにプロテシスとディアコニコンの外壁にはスタッコ装飾があった」「三廊間の扉口には，すべて上方にネストリウス派の十字を刻む。その独特の形が認められたのはここが最初である。花模様や渦巻き文，蜂の巣文もみな型作りで，ケルマンシャー近くのターキ・ブスターンのササーン朝記念物にある石の飾りと驚くほどよく似ている。それにより，修道院の建築とその教会の年代が，5ないし6世紀であると推定される」と年代観も同時に述べる［*ibid.* : 13－4］。さらに「聖所の背後に，長くかつ広い部屋が二つ並んでいる。上下3段に多数のアルコーヴが並び，これら

の部屋が図書室だったことを知る。さらに東奥，図書室の続きにあるのが，三方を廊下が囲む集会室だ。四周にベンチがまわる。」と，かなり断定的に付属施設を解釈している［*ibid.*: 14］。実際の遺構を見ないことには彼の言を評することはできないが，在りし日の修道院教会の姿がそのまま凍結されたような遺跡だったことは想像に難くない。ただスタッコ装飾を基準にした年代観がどこまで信のおけるものなのか，イラン高地のレリーフとの対比だけでは説得力に欠けよう[10]。ほとんど紹介されていないが，ほかにも多くの出土品があったというから，より総合的な報告をぜひ待ちたいと思う。

3　ファイラカ島アル・クスール遺跡

他方ファイラカ島はクウェイトの沖合に浮かぶほぼ全面が平らな島である。ヘレニズム期の遺跡が西岸に集中して発見されており，この島が古典にいう「イカロス」に比定されることが確実となって近年とくに注目されている[11]。

それに対し，フランス調査団が教会遺構を発見したアル・クスール遺跡は，遠く離れて島の中央に立地する。イタリアの調査団もかつてこの遺跡を訪れたことがあり，その折に全体の概略図を残している［Kennet 1991 : fig. 2］。遺構は南北 1.8 km 東西 0.8 km の範囲に点在し，教会は「300 m 四方ほどの，狭いが建てこんだ中央部」［*ibid.*: 98］にあったらしい[12]。ファイラカ島におけるキリスト教徒の足跡は，いまのところこの遺跡しかないようだ。

1988 年の試掘調査で，石膏張りの床を持つ日干し煉瓦建物からスタッコの破片が出土し，接合してみると十字架になったことから，本格的な調査が計画されたという。翌年に行われた第 1 回の本調査で，一棟分の教会遺構のほぼ全容が掘り出された（図 4）。これについての最も詳しい報告としては，調査を率いた 3 名によって公表されたもの［Bernard et al.

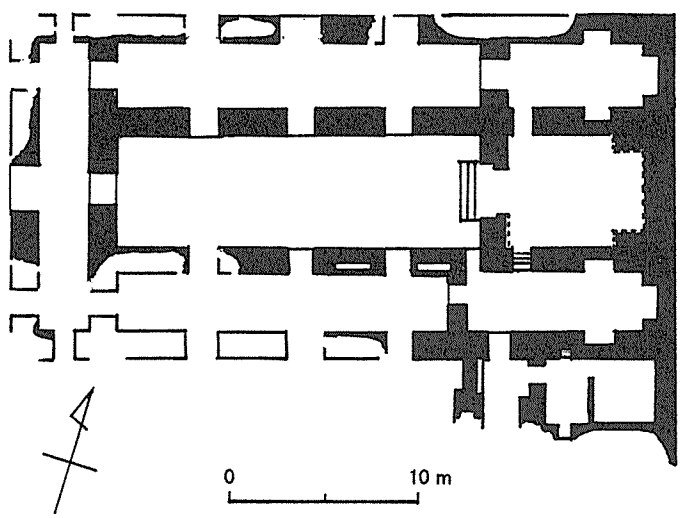

図 4　アル・クスール遺跡教会堂の平面
（ベルナールらの図［Bernard et al. 1991 : Fig. 19］より筆者作図）

1991]（これをAAE報告と仮称する），やや遅れてそれを補完する形でオックスフォードのアラビア学セミナーで発表され，その会議録に掲載されたもの［Bernard & Salles 1991］（これをPSAS報告とする）とがある。ここでは一応前者にしたがって遺構の描写を進め，後者で補うこととしたい。まずAAE報告の記述からはつぎのような建築形状を知ることができる。

建物の方位は西南西―東北東，ほぼ全体を検出することができ，その全長35 m，幅19 mであった。ほかに発掘途中の南付属室群と，未発掘ながら地表面からわかる北側延長部分がある。西側正面は，街路というより小さな広場に面していたらしい。東側外壁は確実に南に延びており，未発掘の付属室群と一体になる。その壁体は屋内床面から1 mの高さまで，目地材を用いずに石を積んで上張りとする。

堂内のプランは三廊式で，西端は間口15.6 m，奥行き2.6 mのナルテクスに通じる。ここから外部に対しては，正面3箇所を含む5つの開口が用意されており，幅2.4 mの西正面中央のものが最大で，扉があった痕跡は認められなかった。中央の身廊は長さ19 m，幅5.6 mの長方形で特別な備えなどない。東端に3段の階段があって，各廊より0.45 mほど高い内陣に通じる。身廊の両側にも3つずつの開口があって側廊に通じる。ここには丁寧な戸締り装置の痕を認める。身廊の床は石を敷いて下地とし，石膏プラスターを厚く二重に塗り上げるのを原則としたらしい。三廊を仕切るのは厚さ1.40 mないし1.50 mの煉瓦積み壁体で，1.50 m幅の開口3カ所ずつを左右対称の位置に設ける。

内陣は身廊に向かって3 mの幅で開き，1段の繰り形を付けているので内側ではその分0.50 mだけ狭まる。戸締り装置の痕跡はない。内陣の東寄りは破壊が激しく，内面はのこっていない。西寄りには南北両側それぞれに通路があって脇陣に通じる。ここには階段と扉を備える。

北側の側廊は幅が3.40 mないし3.50 m。北面に開口が三つ並ぶが，身廊側と違って戸締り装置はなかったらしい。側廊は身廊に比べてはるかに開放的だったことになる。南側廊はまだかなり掘り残されているが，およそ北側廊と対称をなす。ただ脇陣が手前に張り出していて，その分側廊が短くされた。大型のスタッコ製十字架がこの近辺から出土している。また，身廊を隔てる仕切り壁を穿って墓としていたのもこちら側だった。

こうして見ると，三廊における開口の対称的配置，その仕切り壁の形状，内陣回りの高さ関係や脇室への通路など，アイン・シャーイアの遺構とあまりにも類似点が多いことがはっきりする。とくに注目したいのは，身廊を必要に応じて外部とまったく遮断できるように計画されていることで，同じく3内陣構成をとるシリア方面のバシリカではありえない方式である。そこには計画理念の相違があったにちがいなく，ひいては典礼上の相違を念頭において両者を対照する必要があるだろう。

PSAS報告の方には，この遺跡の層序がまとめられており，それによると下位から順に表層を第V層とし，教会創建期にあたる第I層を，わずかな出土品から7世紀中ごろとする

見解を示す。教会の廃棄はIII層期の8世紀後半か少し後とする。また基本的な壁の組積を，日干し煉瓦に泥や砂をまぜたものとみなし，煉瓦寸法として長さ0.45 m，厚さ0.10 mを，壁の厚さとして1.60 mという値を提示している。

II　建築上の比較

アイン・シャーイアとハーグ島の教会堂は，ともに周囲に壁がめぐり，それに沿って小部屋が並んでいる。アイン・シャーイアに比べると，ハーグ島の方では文書庫や会議場など，いくらか機能が推定できる複雑な付属室群も発見されている。アル・クスールの場合は囲壁があった証拠は報じられていないが，クスールという名前自体が城ないしは砦という意味合いを含んでいるので，そういう構えがまだ埋もれているのかもしれない。発掘を終えた範囲がまだまだ小さいので，囲壁がなかったと断定することはできない。かりに教会が集落の中に開かれた状態で単独に建つとすれば，アル・クスールに対する見方を，他の2例とは別にしなければならない。そこは平信徒が居住する通常の村落だったことになり，それは教区教会のあり方だからである。

調査の精度はともかく，ハーグ島の遺構についてはかなり広い範囲にわたって報じられているのに対し，他の2遺跡はまだ部分的発掘にとどまっている。そのため，相互比較の観点を付属施設も含めた全体の構成にまで及ぼすわけにはいかない。以下では，比較の因子を教会堂そのものにほぼ限って議論をすすめることにする。

1　平面上の矩形要素

規模の点では3つの教会とも同じではない。アイン・シャーイアの遺構が最も小さく，アル・クスールのものが最大である。軀体の壁厚も，規模に応じてそれぞれ相違する。しかしながら，平面構成から見ると，どの教会にも三分形の内陣があって，少なくともその主内陣の奥壁に矩形のニッチをそなえている。礼拝広間は仕切り壁でそれぞれを隔てる三廊式で，身廊と両側廊とは軸対称の位置に配された狭い開口によって通じる。三廊の前面にもう一つの部屋が横たわる点も共通し，ハーグ島とアル・クスールではナルテクスと呼んで差し支えない造りとなっている。アイン・シャーイアの場合にも，正面に入口がなく床舗装もされていないのでナルテクスと呼ぶには躊躇するが，やはり三廊を横断する部屋が前面に取り付いている。

このように三つの遺構を最も客観的に比較する手段がその平面構成に潜んでいることがわかる。そこで各平面の構成を，より幾何学的に，かつ数量的に比較できるよう，次のような共通する矩形要素を抽出する。先ず最も外側の輪郭をなす矩形。この場合，アイン・シャーイアの前室部分には，ナルテクスと呼ぶべき他遺跡とちがった性格があるかもしれないので，その部分を含んで計測した値と除外した値の両方を検証する。次いで内陣と三廊を包含して

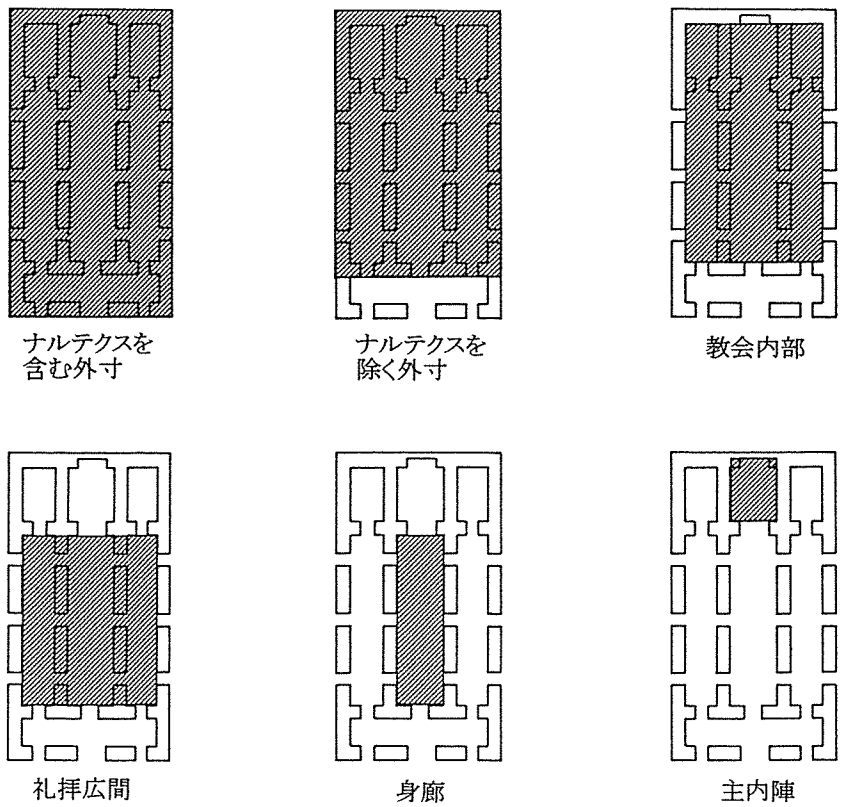

図5　教会堂平面の矩形要素

教会の内部空間全体をなす矩形，三番目は三廊部分，四番目は身廊のみ，最後に主内陣の矩形をとりあげる（図5）[13]。これらの矩形を法量的に比較すれば，教会建築の設計に一定の原則ないしは規格が存在した可能性を数字の上から裏付けられるにちがいない。

ただし，少なくとも幾何学上の比較は二通りの比較方法があると考えられる。まず各々対応する矩形の実寸法相互の比較である。その比率が建物全体の規模の比とどのくらい近似するかが焦点となる。ここではアイン・シャーイアの値を1とし，他の教会での計測値の比を指数として明示した。第二に，計測値からそれぞれの矩形の縦横比を算定し，対応する矩形間における幾何学的な相似の有無を判定することである。教会規模と各矩形要素の大きさとがどのような比例関係にあるかをみきわめるためである。必要なすべての数値を別にまとめておく（表1）[14]。

一覧表を作成した結果，三教会の平面計画上，二つの注目すべき事実を読み取ることができる。第一は，すべての教会について，各々の矩形要素が同様な比例をもち，とくにナルテクス部分を除外した輪郭の矩形が厳密な一致を示す点である。その値は8:5にきわめて近い[15]。とくにアル・クスールとハーグ島の間では，ナルテクスを含む輪郭，礼拝空間，主内

表1　三教会遺構の矩形要素とその寸法

遺　跡		アイン・シャーイア		アル・クスール		ハーグ島	
矩　形		計測値	指　数	計測値	指　数	計測値	指　数
ナルテクスを含む外寸	L(m)	26.5	1	35.1	1.32	28.7	1.08
	W(m)	13.8	1	19.1	1.38	15.5	1.12
	L/W	1.92		1.84		1.85	
		(19:10)		(9:5)		(9:5)	
ナルテクスを除く外寸	L(m)	22.4	1	31.0	1.38	25.0	1.12
	W(m)	13.8	1	19.1	1.38	15.5	1.12
	L/W	1.62		1.62		1.61	
		(8:5)		(8:5)		(8:5)	
教会内部	L(m)	20.1	1	28.6	1.42	23.5	1.17
	W(m)	11.5	1	15.8	1.37	13.0	1.13
	L/W	1.75		1.81		1.81	
		(7:4)		(9:5)		(9:5)	
礼拝広間	L(m)	14.5	1	19.0	1.31	15.5	1.07
	W(m)	11.5	1	15.9	1.38	13.0	1.13
	L/W	1.26		1.19		1.19	
		(5:4)		(6:5)		(6:5)	
身　廊	L(m)	14.5	1	19.0	1.31	15.5	1.07
	W(m)	3.9	1	5.6	1.44	5.4	1.38
	L/W	3.72		3.39		2.87	
		(19:5)		(17:5)		(14:5)	
主内陣	L(m)	5.6	1	7.5	1.34	7.2	1.29
	W(m)	3.9	1	5.6	1.44	5.4	1.38
	L/W	1.44		1.34		1.33	
		(7:5)		(4:3)		(4:3)	

L：長辺方向長さ　W：短辺方向長さ

陣という三つの矩形について比例が等しい値を示す。それらの値はアイン・シャーイアのそれぞれの矩形と若干は異なるというものの，計画的に意図されたような差を示すわけではない。

第二の点は，矩形規模の指数から導かれる。一見したところ，一つの教会においてその値はまちまちのようだが，アル・クスールの場合，指数値は1.31と1.44の間にしかなく中間値は1.38となる。アル・クスールの指数欄には都合12の値が示され，二通りの外郭それぞれの幅，教会内部と礼拝空間の幅，礼拝空間と身廊の長さ，身廊幅と主内陣幅といった一致して当然の指数値が含まれるにしても，少なくとも8ヵ所の寸法についてアイン・シャーイアとの比率がごく近い値を示している。1.38という値はそれだけの重みをもつ数字だといえる。さらにアイン・シャーイアの平均的な軀体の壁厚は1.10ないし1.15 m，アル・クスールのそれは1.60 mで，後者の前者に対する比は約1.40となる。この値と指数中間値との近似が偶然の一致と済ませてよいものだろうか。これら二つの教会の平面計画の間には，すべての矩形要素について一定の比例関係が明らかに存在し，しかもそれが軀体の壁厚にまで反映しているとみてよいのではなかろうか。ハーグ島の場合，壁厚は報じられておらず，図面から推し量るには無理があるのでここでは不明とせざるをえないが，主内陣と身廊とを除けば，指数値はおおむね1.10前後に納まっており，ここにも有意の比例関係があった可能性

は大きい。

2 その他の建築要素

平面構成以外にも三つの教会には，注目されてしかるべき共通の建築要素が認められるので簡潔に整理しておきたい。

(a) 教会堂の方位

一般に教会建築は正面を西に向け，聖所を東端に置くことを常とする。シリアの諸例では最も大きく振れる場合でも12度程度だったと報じられている［Butler 1929：182］。それに対し，アイン・シャーイアでは主軸が60度も振れるのをはじめ，バビロニアの教会には方位をあまり意に介さない例が少なくない［Okada 1991：74－9］。アル・クスールの教会は15度程度，ハーグ島の遺構はおよそ30度ほど振れている。いずれもその振れ方は大幅であり，とても主軸を真東西方向に合わせようと計画されたとは思えない。シリア，あるいはヨーロッパの事例に認められる方位原則とはかけはなれた方位を示す点で，三教会は共通する。

(b) 組積法

アイン・シャーイアの壁体は日干し煉瓦積みで，1.10ないし1.15 mの幅を3枚，または2枚と半切煉瓦2枚で積む。壁面はみな石膏プラスターで仕上げる。アル・クスールでもやはり日干し煉瓦が主体で，場所によって練り土も使用された。部分的に確認された煉瓦の寸法は45 cm四方に10 cmの厚さを標準とする。アイン・シャーイアが37 cm前後を標準としたのに比べるとずっと大判の日干し煉瓦である。建物の比例に認められた1.40倍もの大きさまでにはさすがに至っていないが，日干し煉瓦としては最も大きい部類である。同時に日干し煉瓦造の教会建築としても最大級の規模であり，シリアには比べるべき教会はない[16]。

他方ハーグ島の教会は，ほとんどの部分を切り石で積む。ただ切り石積みといっても，直方体に切り出された石をモルタルなしで積んだシリアの初期ビザンチン時代の聖堂建築などとちがって，ササーン朝以後によく見受けられるペルシア建築特有の粗い切石による組積であった。同様の石積みは，イラクのクセール遺跡の教会堂Aの造りを想起させるものであり［Finster & Schmidt 1976：27－39］，主内陣をドームで覆ったと推定される点もこれと共通する。こうした建築技術や形態は，アッバース朝期のウハイダル城にも確実に継承されており，けっしてバビロニアとの系譜的関連を断つものではない。

(c) 教会への入場口

アイン・シャーイアでは，教会の東南側に煉瓦舗装された内庭があり，主たる入口はこの長辺側にあった。北西辺は付属する部屋に直接通じ，ナルテクス様の通路を設けた南西面には，それらしい入口は見当たらない。ハーグ島の建物自体は広い内庭に突き出す形に建てられ，公刊された平面から見る限りでは三方向から等しく立ち入ることができた。ナルテクスの前面中央には大きめの開口がある一方，両側辺にもそれぞれ三つずつの扉が内庭に通じて

いる。アル・クスールの教会もこれに似ていて，少なくとも西と北は外部に向かって各3か所に通路を開き，その中央開口部が両脇より大きくなっている。南面については発掘が十分でないのでわからない。三つの教会に共通する開口部の配置はというと，三廊部を形成する4枚の平行する壁体の同じ位置に三つずつの開口を設け，それによって四つずつの開口が横断方向に正しく並ぶのである。こうした平面形状は，可能な限りの対称性を追求した結果にほかならず，ある種典礼上の要求に発する可能性がある。

(d)　教会内埋葬址

アイン・シャーイアでは，身廊と東側廊とを隔てる内陣寄りの壁の中に長さ2.4 m，幅0.9 m ほどの箱状の造りが発見された。内壁面に丁寧に石膏を張り，底面をさらに掘りこんでより小さな収容空間（1.35 × 0.4 m，深さ 0.71 m）を設ける。最終的には日干し煉瓦と石膏プラスターで塗りごめて壁体を造ってしまい，その存在を隠していたように思われる。内部からは何も出土しなかったが，こういう二段がまえの造りは，イスラーム期より古い時代からメソポタミアに広く普及していた最も簡便な墓壙形式とよく似ている。この解釈について，手がかりは乏しいものの，当初は誰かの遺骸を埋葬するために設置され，のちに何らかの理由で中身をすべて取り除いて外からはわからぬように隠してしまったのではないかと，筆者は考えている。

アル・クスールの教会堂にも全く同じ場所に同様の造りが発見された。長さ 1.8 m，幅0.5 m ほどで，わずかながら遺骸の細片と副葬品らしい貝殻の出土が報じられている。造りが似通っているばかりか，その場所までアイン・シャーイアと全く一致するという事実は，こういう小さな遺構に教会建築そのもののあり方を解く鍵が潜んでいるように思えてならない。

少し様子は異なるが，ハーグ島の教会堂にも埋葬址があった。ギルシュマンはそれを次のように描写する。「床面より4インチの高さに漆喰で封じられた墓が北側廊で発掘された。この埋葬には4人分の大人の骨があり，それらはばらばらに投げこまれていた。したがって，この地点が本来の遺骸埋葬所だったとは考えられない。別の場所から骨をもちこんだことは明白で，おそらくはキリスト教殉教者の遺骨をこの教会に埋納する目的で大陸の方から移したものと思う（あえて言うなら，この建物の聖別儀礼を催す機会においてのことだったろう）」[Ghirshman 1960 : 13]。

彼の報文をここに引用したのは，最後に記された括弧付きの彼の推測こそ，アイン・シャーイアとアル・クセールの墓壙の検出状況に対する最も有力でかつの共通性する解釈となるように思うからである。アイン・シャーイアでは，主内陣前方にあたるその壁の漆喰面に限って，複数の人の手によるシリア語祈禱文が記されていた [Hunter 1989 : 89－104]。何故そんなところにという疑問も，墨書が殉教聖者の埋葬所に因んだものとすれば，無理なく諒解できるのである。

3 建築的相似の意味

三つの教会建築に対し，上に記した相互比較のほかにも必要な考察がまだ残されていないわけではない。たとえば，教会建築自体についていえば，三廊部と内陣それぞれの屋根構造の追求，さらには左右の脇陣部分に見られる対称性の乱れについてなどである[17]。また教会堂が立地する周囲の状況をみると，アイン・シャーイアとハーグ島修道院には，教会堂を中心とした城郭的構えから離れて，修道僧たちが生活した居住区があった[18]。また給水施設としてカナートと呼ばれる地下水路が用意されていたという共通点も見られる。ギルシュマンがキリスト教徒の墓とみなした岩窟と，アイン・シャーイアの西につづくドゥカキン洞窟群との比較も，その機能や利用法の点で興味深い問題をはらむ[19]。現時点では，残念ながら発掘そのものも公表された情報も不十分なため，これらの議論は控えざるをえない。さらに三つの遺跡には，十字架をモチーフとした類似のスタッコ板が出土したという共通項もあり，相互の関連を吟味する上で看過できない。他の考古遺物とともに編年的かつ図像学上の検討は今後の課題としたい。

以上のような譲歩が伴うとはいえ，三つの教会堂に共通する建築計画の理念と手法があった事実はここまでの比較考察から明らかであろう。建材の点で日干し煉瓦と石材という相違はあっても，それぞれの平面形は執拗なまでの対称性と厳格な比例の原則に基づいて設計されたのである。またどの建物にも埋葬施設を同様の位置に取りこんで聖別する慣習もうかがわれた。

ところで，それぞれの発掘者に従えば，各教会の年代はつぎのとおりである。アイン・シャーイア修道院は創建を8世紀後半とし9世紀中存続したとみる［Fujii et al. 1989 : 60－1］。アル・クスールの教会は少量の土器から7世紀半ばを創始の時期とする［Bernard & Salles 1991 : 11－2］。ハーグ島修道院は，上述したように，スタッコ製品の意匠上の特徴からの判断だけで5世紀ないし6世紀という年代をギルシュマンは提示するが，筆者にはそこまで年代を限定してよいものか疑問に思われ，アル・クスールの発掘者からも同様な指摘が表明されている［Bernard et al. 1991 : 168］。いずれにせよハーグ島の遺構がササーン朝の時代まで遡りうるかどうかは疑わしい。

互いにはるか離れて立地するこれら教会の建設に，共通の組織的背景と同時代性を認めないわけにはいかない。イスラームが西アジアに勃興した時代にもなお，ネストリウス派と通称されるシリア語キリスト教徒たちは，バビロニアからアラビア湾にかけての広い地域で，宗教共同体としての絆を温存していたと考えるほかないのである。

おわりに

イラク西南沙漠地帯の遺跡アイン・シャーイアで新たに発見された修道院の遺構に発せられた議論は，アラビア湾の2島でも相次いで発見された相似の教会遺構と対比することを通

じて，従来ローマ・ビザンティン文化圏に偏りがちであった初期キリスト教文化の問題を，初期教会建築の様式に新たな類型をもたらすなど，改めて西アジア独自の立場に引き寄せることを可能にしたと思う。また，イスラームの盛期にもこれらの地域を率いたキリスト教団に有力な建築規範が存在したことをうかがわせるという意味でも注目しなければならない。

従来考えられていた東方キリスト教建築といえば，バトラーやチャレンコの業績に代表されるシリアの様式，とくに建築家マリアノス・キリスによるとされる大聖堂形式と，G. ベルやM. マンゴーらが集成し，現トルコ領トゥール・アブディン地方に限って提唱された「教区教会」形式と「修道院教会」形式などが代表とされた。

メソポタミア低地部についても，教会史のごく初期の段階から教区の存在が知られ，文献的にも多数の教会，修道院があったことはわかっていた[20]。考古学的には，今世紀になって，埋もれていたいくつかの教会遺構が明らかにされたものの，O. ロイターがかつてササーン朝建築の範疇として取り上げた［Reuther 1938: 560－6］以外，まとめて論じられることはなかった。西の方から見ればシリアに流布した様式の亜流，東の観点からはササーン朝建築の変形として片づけられていたのである。関心をもつ研究者が少なかったといえばそれまでだが，それらを独立した建築範疇として理解するには，事例が散発的にすぎ，様式的共通性にあまりにも欠けていた点から見ればそれも仕方なかったといえるだろう。

メソポタミアでは，5－7世紀というまだ教会建築の歴史が浅かったと思われる時代，建築造形上，隣接地域から多大な影響を受けたことはまちがいない。その国土自体は，しばしばキリスト教徒に敵対したササーン朝ペルシアの支配下にあった。したがって，クテシフォンやキシュの宮殿に例証されるように，ペルシア側からの影響も避けられなかったはずだ。シリアやトゥール・アブディン地方に比べてメソポタミアの教会形式に多様さが著しいのはそのせいと考えられる。またある一面では，外部からの影響には簡単には染まりきらない在地の建築エネルギーとあらがった結果と見ることもできよう。それはパルティア支配の時代に，型にはまらない擬似周柱式の諸建築を生んだことからも類推される。そして，イスラームが到来する時代になっても，否，むしろイスラームだからこそ建築造形に関わる伝統的なローカリティは衰退することなく，湾岸地域と共有しあような，独特の教会形式をメソポタミアの国土にもたらしたとみなすことができるではないだろうか。

今後は，まだまだ多く埋もれているにちがいない遺構をていねいに掘り起こしてゆく必要があろう[21]。さらにそうした作業とともに，西アジア全域を視野に入れた類型学的考察を進めてゆきたいと考えている。

注

1）アッタール洞窟遺跡の調査は1984年まで断続的に実施された。74年までの成果は，地理的環境，発掘経過，洞窟の構造，考古遺物，周辺から採集の旧石器という章立てで1冊の報告書にま

とめられ［Fujii 1976］，以後の成果については，国士舘大学イラク古代文化研究所の機関誌『ラーフィダーン』に逐次報告されている。埋葬址の年代は，C丘12洞窟の調査報告中に示された1－3世紀という見解が最も妥当なところと思われる［藤井他 1986：44－5］。

2） イラク領内に知られる初期キリスト教遺構の建築形式については，すでに拙稿において，アイン・シャーイアの遺構を中心に10余例との比較を試みたことがある［Okada 1991］。また近刊予定の『桐敷真次郎博士献呈論文集（仮題）』（本の友社）では，最近の成果を加味し，同じ問題を「アイン・シャーイア修道院遺跡およびイラク領内の初期キリスト教教会形式について」と題して日本語で論じた。イスラーム興隆期のメソポタミアの南部では，北部とちがって建築上の独自性が強いこと，さらにササーン朝建築ともイスラーム建築とも異質な，キリスト教に伴う新たな建築類型を考慮する必要があるとの主張がその論旨である。とくに，アイン・シャーイアの遺構は，同じく西南沙漠に立地するクセール遺跡教会堂Aを範とする可能性を指摘し，さらには平面計画上の類似からハーグ島の修道院教会堂遺構にも言及した。

3） その報文は，島に石油基地を建設するにあたっての事前の文化財調査に基づくもので，一般向けに書かれた小冊子であるため，先に記したような不十分さがぬぐえない。ヘレニズムの遺跡を前段で網羅し，後半を問題の修道院の調査報告に充てている。アル・クスール遺跡の発掘者らによると，ハーグ島の本格的な最終報告が現在準備中とのことである［Bernard et al. 1991：168］。

4） アル・クスール遺跡の調査は，1988年の予備的な試掘の結果によって翌年から本調査が開始されたもので，1990年以降も継続されるはずであった。確かなことは伝えられていないが，突然の湾岸危機により，調査は中断したままになっているようだ。

5） アル・クスールの発掘者も指摘している［Bernard et al. 1991：162－3］が，「ネストリウス派」という呼称は，キリスト教史には門外漢である筆者にとってさえあまりにも曖昧な集団概念として聞えるので避けたいところである。歴史学上の見解として，A. ハーラクは，彼ら自身がそういう呼ばれ方を拒んだ点を重視し，不適切さを指摘している［Harrak 1989：14］。

6） かつてシリアの初期教会建築を調査したC. H. バトラーは，基準尺の問題に言及した上で，シリアでは紀元500年ごろ，1 cubit＝555 mmというバビロニア由来の単位尺が1 foot＝370 mmに変更されたと述べている［Butler 1929：182 f.］。これに基づけば，アイン・シャーイアで使用された煉瓦の規格はちょうど1 footにあたり，壁厚は2 cubitsまたは3 feetだったということになる。壁上部を積んだ煉瓦には，のちの修復時に採用されたものかもしれないが，32×32×11 cmという寸法もあるので，基準尺がここで意図されたものだったとは限らない。ただ，他の同時代の日干し煉瓦建築を詳細に検討すべき課題ではある。

7） この部屋の両短辺とも発掘が及んでいないので他の可能性も大いに残されている。東端については壁で遮られると推定している。

8） 内陣を構成する諸室に対する呼称は，キリスト教宗派や教会様式によって様々で，メソポタミアでどう呼ばれたかは定かでない。シリア教会における通常の脇陣機能からいうと，北側が聖体安置や聖餐準備にあてられるプロテシスprothesis，南側が祭具や装束を用意したディアコニコンdiaconiconであり，サクリシティsacrisityもおおむねこれにあたる。パストフォリウムpastophoriumは両方の部屋を指す。主内陣はクワイヤーchoir，ベーマbema，チャンセル

chancel，プレスビテリウム presbiterium などと呼び，多くの場合半円形をなして後方に張り出した空間をアプス（またはアプシス）と呼んでいる。至聖所 sanctuary という呼称は主内陣のみにも3室全体に対しても用いられ，定まらない。C. バトラーは主内陣に対して presbitery，脇陣に対して side chamber をあてる［Butler 1929：187－93］。発掘される遺構の場合は室機能を確定することがしばしば困難なため，報告者が恣意的に言葉を選ぶ傾向が強い。3室それぞれを chapel と称するタルボットライスのような立場や［Talbot Rice 1932：27－9］，3室が並ぶ形式に対して「三分形聖所 trpartite sanctuary」という呼称をあてることもある［Krautheimer 1965：215］。

9）同じ見解は，かつてヘルツフェルトも提示しており，ギルシュマンもそれに沿ったものと思われる［Herzfeld 1934：103－4］。

10）彼が図示した数少ない出土品のうち，十字架の図像は，アイン・シャーイアや後述するアル・クスールの出土品にごく近いものと見るのがふつうであろう。なお，アイン・シャーイア出土の十字架図像については拙稿を参照されたい［Okada 1990］。ハーグ島の遺品との比較についてはまた稿を改めて考察したい。

11）ヘレニズム期の遺跡はここでの主題ではないが，ハーグ島に比べると，イタリア，フランス，デンマークなどによる考古学調査の成果が相次いでいる［Potts 1990：154－96］。

12）フランス調査団の報告者のだれひとりとして，教会の位置を正確に記していない。別に調査された「邸宅 56」が遺跡中央にあって，教会の西隣にあたるという。

13）C. バトラーが集成したシリアの初期教会建築について，J. ウィルキンソンはその平面構成の統計的処理を試み，基本的数値を，輪郭 external，教会内部 church，礼拝空間 nave という3つの矩形に求めており［Wilkinson 1984］，本稿はその方法を参考とした。

14）ハーグ島教会の計測値は，報告書の記述からは全く特定できないので，そこに掲載された平面図上で測りこんで得たものである［Ghirshman 1960：Plate 12］。したがってそれらの実寸値は厳密なものではない。けれども，矩形のプロポーションは十分有効な値を与えると考える。アル・クスールの値も，必ずしも報告者の記述にしたがったものではない。というのは，すべての値が記述されているわけではないし，報告者によって，同じ矩形に対して若干異なった数値を挙げることすらあるからである。ここでも公刊された平面図から得た値の方を採用することにした［Bernard & Salles 1991：Fig. 1］。アイン・シャーイアの計測値は筆者自身の調査結果に基づいており，既刊の報文中にすべて明示されたものである［Fujii et al. 1989：38－40；Okada 1991：72－74］。

15）8：5という値がいわゆる「黄金比」の近似値に相当することに興味がそそられる。むろん建設者たちがそういう比例を意図的に採用したことを証拠立てる手がかりはないけれども，その採用が西洋古典の影響とすれば新しい事実であるし，またそうでないとすれば，東方キリスト教世界という別の地域においても人々の建築経験が「黄金比」に到達していたことになり，その比例の普遍性を証する事実としてここに挙げた遺構は貴重なデータとなる。ちなみに，アッバース朝当時，バグダードのキリスト教徒たちは西洋古典のイスラーム世界への翻訳者としてカリフに重用されていたといわれ［森安 1978：238－9］，ギリシア・ローマ伝来の建築理論が東方の地にもた

らされていたとしても不思議はない。

16) イラク西南沙漠にあるヒーラ遺跡には，長辺長35 mを超える日干し煉瓦造教会が建てられていたらしい［T. Rice 1932 : 279－82］。

17) 3教会のうち，ハーグ島の主内陣はドーム架けだったというギルシュマンの見解がある［Ghirshman 1960 : 12］。その他については目下手がかりがない。また，ハーグ島とアル・クスールの両教会では南脇陣が若干側廊に張り出している点が目につく。アイン・シャーイアではそういう張り出しはないが，両脇陣の外壁まで発掘されていないので，この部分の対称性を論じる手がかりは，やはり十分でない。

18) ハーグ島では教会から数百ヤードはなれて数棟の廃墟があり，聖職者たちが家族とともにそこに住んだと見られている［Ghirshman 1960 : 14］。アイン・シャーイアにもこれに相当するかもしれない地点があり，B区と呼んでいる［Fujii et al. 1989 : 67－72］。

19) ドゥカキン洞窟には修道僧の独居房として利用された形跡があった［Fujii et al. 1989 : 81－7］。他方ハーグ島岩窟の内部について，そういう利用があったかどうか伝えられていない。

20) 歴史的にみて，ペルシアのキリスト教は早くも2世紀には北イラクのエルビル市を中心とするアディアベーネと呼ばれた地域にまず広まり，5世紀にはクテシフォンに東方教会の総大主教の座が置かれる［Asmussen 1983 : 924 ff］。本論と最も関係の深いヒーラが管轄する教区内には，イスラームの到来以前，40前後の教会施設があったという［Fiey 1968 : 203－243］。

21) 例としてユーフラテス流域テル・ビア，ティグリス沿いのデイル・スィトゥンでビザンティン時代に遡るとされる教会遺構が近年報じられている［Strommenger 1994 ; Curtis 1997］。また先年，筆者がシリアのハブール川沿いの遺跡群を訪ねた折り，トゥネイニールという遺跡に2カ所で教会堂の遺構が発掘されていたのを目にした。両方ともG. ベルのいうトゥール・アブディンの修道院教会形式に則っていたことに驚かされた。1998年末現在その報告公刊はまだ見ない。さらに湾岸地域サウジ領内でも，遺構が調査されるようになった［Langfeldt 1994］。今のところ，これらの中にアイン・シャーイアなどと相似の遺構はないようである。

参考文献

AAE : Arabian Archaeology and Epigraphy. London.

BaM : Baghdader Mitteilungen. Berlin.

BCSMS : The Canadian Society for Mesopotamian Studies Bulletin. Toronto.

CAH : The Cambridge History of Iran. Cambridge.

MDOG : Mitteilungen der Deutschen Orientgesellschaft. Berlin.

PSAS : Proceedings of the Seminar for Arabian Studies. Oxford.

Asmussen, J. P. (1983) Christians in Iran. *CAH* 3－2, 924－48.

Bell, Gertrude and M. M. Mango (1982) *The Churches and Monasteries of the Tur 'Abdin* (revised). London.

Bernard, V., Callot, O. & J.-F. Salles. (1991) L'Eglise d'al-Qousour Failaka, Etat de Koweit. *AAE* 2-2, 145-81.

Bernard, Vincent & Jean-Francois Salles. (1991) Discovery of a Christian Church at Al-Qusur, Failaka (Kuwait). *PSAS* 21, 7-21.

Butler, C. H. (1929) *Early Churches in Syria.* Princeton.

Curtis, John (1997) The Church at Khirbet Deir Situn. *al-Rafidan* 18, 369-79.

Fiey, J. M. (1968) *Assyrie Chretienne,* Vol. Ⅲ. Beyrouth.

Finster, B. & J. Schmidt. (1968) Sasanidische und frühislamische Ruinen im Iraq. *BaM* 8.

Fujii, Hideo (ed.) (1976) *Al-Tar I, Excavations in Iraq,* 1971-1974. Tokyo.

Fujii, H., Ohnuma, K., Okada, Y., Matsumoto, K., Shibata, H. & H. Numoto. (1989) Excavations at Ain Sha'ia Ruins and Dukakin Caves. *al-Rafidan* 10, 27-88.

Ghirshman, Roman (1960) *The Island of Kharg.* Tehran.

Harrak, Amir (1989) Early Eastern Christianity and Monasticism in Mesopotamia. *BCSMS* 18, 11-23.

Herzfeld, Ernst (1935) *Archaeological History of Iran.* London.

Hunter, Erica C. D. (1989) Report and Catalogue of Inscribed Fragments: Ain Sha'ia and Dukakin Caves near Najaf, Iraq. *al-Rafidan* 10, 89-108.

Kennet, Derek (1991) Excavations at the Site of Al-Qusur, Failaka, Kuwait. *PSAS* 21, 97-111.

Langfeldt, John A. (1994) Recently discovered early Christian monuments in Northeastern Arabia. *AAE* 5, 32-60.

Okada, Yasuyoshi (1990) Reconsideration of Plaque-type Crosses from Ain Sha'ia. *al-Rafidan* 11, 103-12.

Okada, Yasuyoshi (1991) Early Christian Architecture in the Iraqi South-western Desert. *al-Rafidan* 12, 71-83.

Okada, Yasuyoshi (1992) Ain Sha'ia and Early Gulf Churches: an Architectural Analogy. *al-Rafidan* 13, 87-93.

Potts, D. T. (1990) *The Arabian Gulf in Antiquity,* Vol. II. Oxford.

Strommenger, Eva (1994) Die Ausgrabungen in Tall Bi'a 1993. *MDOG* 126, 11-31.

Talbot Rice, D. (1932) The Oxford Excavations at Hira, 1931. *Antiquity* 6, 276-91.

Wilkinson, John (1984) What Butler Saw. *Levant* 16, 113-27.

藤井秀夫，坂本和子（1986）アッタール遺跡第六次調査（C丘12洞窟）の新染織資料調査報告『ラーフィダーン』7，37-54.

森安達也（1978）『キリスト教史　Ⅲ』（世界宗教史叢書3）山川出版社.

（国士舘大学イラク古代文化研究所）